

上方舞の今日的意義： 歴史的社会的文脈とジェンダー、 主体に関する試論

国立民族学博物館 栗原奈名子

1998年より吉村流5世家元吉村雄輝夫氏に実際に舞の指導を受けながら大阪の上方舞の研究を進めてきた。

稽古の中で腰を落とすことをなによりもまず厳しく訓練される。「お尻をどんと落とす。」「膝でつく」、つまり支えるのではなく、大腿、脛の筋肉、背筋、腹筋によって、支える。上半身は能の前傾姿勢とは異なり、あくまでもまっすぐ、西洋風に胸をはることも、背中を丸めることも許されない。また、腰を楽に落とそうと、後ろ足のかかたが浮いてしまっただけではいけない。大変な負荷を体にかける「辛抱」が必要とされる。

しかしながら、外観としては、上半身は自由で、足腰の動きに連動して、肩、腕、手などは柔らかく流れるようではなければならない。かつ、優雅な涼しげな表情が要求される。「おねおねとした」女形のような動きや表情はご法度である。あらゆる動きが勢いやはずみでは行われず、舞手の筋肉によって厳しくコントロールされる。いったいどのような身体性はどこから発したのであろうか。

上方舞は座敷舞とも呼ばれるように、芸妓によって花街の座敷で育まれてきたものである。確かに船場のお嬢さんが行儀習得のために習っていた。それが一般庶民にも普及した。また、山村流の場合は、歌舞伎との結びつきが強かった。しかしながら、山村、榎茂都、吉村の流儀はいずれも、大阪の花街の検番に入って、芸妓の舞の指導をしていた。舞を主に実践し、経済的基盤となってきたのが芸妓だったことには、疑問の余地がない。¹彼女達は客である商家の旦那衆を楽しませる職業婦人であり、その芸の一つが舞だった。そして、彼女達の現実、少なくとも戦前までは、幼い頃に自分の意志とは関係なく貧困ゆえに親にそのような職業に就くように売られ、厳しく仕込まれたというものであった。

上方舞の中心と言える地歌の作曲家は男性盲人音楽家である当道、作詞家も男性がほとんど（地歌の艶物の歌詞はほとんどが棄てられた女性の嘆きである）、地方は盲人音楽家であったこともあろうが、多くの場合芸妓であったろう。場所は料亭などの座敷。次の間に燭台を2本立てて、その間から出ないように客の顔で舞うというのが慣わしであった。（以前は「半畳あったら舞える」と言われていた。）このような文脈、環境の中で、

舞手である女性の身体はどのように存在したのだろうか。また、歌詞と実際の振り、パフォーマンスはいかなる関係にあったのだろうか。

大変厳しい生活状況にありながら、自らをぎりぎりまで相手にゆだねながら、なおかつ自分として立つ。これこそが完璧に自己の筋肉をコントロールし、弾みなどに動きをあずけない身体性、あくまでもぐっと腰を落とし、地に足をつけ、まっすぐ立つ基本姿勢と結びつく。歌詞でどんなに嘆きが歌われようと、このような身体性は、パフォーマンスにおいて、その内容に添っていく部分と根本で裏切っていく両義的側面を有している。舞は彼女達の職業的機能でありながら、おのずから自己表現となった。舞は彼女達の生の昇華に他ならなかった。座敷舞として影の存在であった舞を舞台芸術にまで押し上げたのは、その強度に他ならない。いったいこのような流れは今、座敷、あるいは舞台においてどのように引き継がれ、あるいは変化を遂げているのであろうか。

個別の流儀を実践し、資料を掘り起こし、数少ない先行研究をクリティカルに読み込んでいく、芸能史研究的観点を含めたパフォーマンス学的研究は、大変な困難を伴う。アメリカの舞踊史家、サリー・ベーンズは、舞踊史家の仕事は、書かれた記録を扱う歴史家の方法とは異なり、考古学者に近いものだと述べ、映像や写真はもちろん、断片、記憶、文脈、書かれた描写などを手掛かりにしながら、研究を進めると記している。²

特に上方舞は口承、「身承」の芸能（そもそも日本の舞踊は師匠の体をなぞって習得するものであり、その訓練方法はバレエやモダンダンスとは大変異なっている。また、当道は盲人。芸妓の多くはいわゆる教育の機会を奪われた人々であった。）である。舞の師匠の世代は次に移行しつつあり、実際に座敷で舞ってきた女性達は高齢に達し、守秘義務が掟の世界に生きてきた人々である。芸妓という職業に対する差別は未だに根強い。

今、舞う場所は座敷から舞台へと変わり、舞手は芸妓からいわゆる「素人」へと入れ替わり、急速に変化が進んでいる。このような状況下ゆえにこそあえて、上方舞の歴史社会的文脈を押さえつつ、女性の身体と言葉、そして音との結びつきをパフォーマンス学的側面から研究する意義があると言える。

1 山村若『上方の舞に命を』大阪：ブレーンセンター（1987年）に、4世山村宗家である著者が南地五花街の芸妓指導をしたこと、彼女の母である先代が同様に芸妓の稽古をしていたことが示されている。

2 Sally Banes, *Dancing Women: Female Bodies on Stage*, New York, Routledge, 1988, p. 8.